特別寄稿

シリーズ「広島教育正常化への軌跡」

なぜ広島の教育は狂ったのか⑯

広島県公立中学校教諭　立 花 一 道

あまりにも多い教職員自殺の不都合な真実④

～ 教育の中立性を踏みにじった同和教育 ～

前号に続き、教職員の自殺について、その様子や背景をお伝えします。

【ファイル 10】

昭和56年1月 31 日、豊田郡本郷町北方小学校　H.M 校長（52 才）、カッターナイフで頸動脈を切って自殺。　前任者が病気で長期入院し、休職になった後、昭和 55 年 9 月 1 日付けで県教委尾道教育事務所指導主事から校長になったばかりでした。29 日にも自宅で自殺未遂的行動がありました。当日はいつも通り自転車で学校に出かけましたが、職員朝礼が始まるまでの間に教育相談室で自殺。自宅に遺書がありましたが理由は書かれていませんでした。

【ファイル 11】

昭和 56 年4月9日、 佐伯郡廿日市町宮内小学校　K.H 校長（55 才）、校内の宿直室で首吊り自殺。遺書はありませんでしたが、主任制度や担任の振り分け、ゆとり教育の授業時間の問題で、３月から教員間で話し合いが続けられており、この日と翌日にも会

議を予定していました。数日前から食事もろくにとれていなかったようです。

３ 人の校長が相次いで自殺した事態を憂慮して、全解連（全国部落解放運動連合会）が全国調査団を福山市と廿日市町に派遣し、7 月 8 日から 3 日間調査活動が行われました。桜丘小を調査したこのときの様子を全解連元委員長の中野初好氏が著書で書き記しています。（働き、学び、たたかって：以下　たたかって）

「福山市の桜丘小学校では『狭山事件』の取り組みなどは異常なまでにやられているし、週別の同和教育の研究会などは年間を通じてやらない週を計算したほうが早いというくらい他の教科を犠牲にしてやられていること、一方では大変な校長いびりがやられている」。（P72）

「全解連全国調査団の広島入りを何よりも恐れたのは『解同』小森一派と『解放教育』推進派の教師でした。福山市と廿日市町に分かれた調査活動に対して、福山では『解同』小森派が、廿日市では『解放教育』推進派教師が、どちらでも前駅や学校周辺に『全解連（日共）の差別キャンペーンを許すな＝部落解放同盟、部落解放共闘会議』のポスターを貼りめぐらし、宣伝カーによる妨害、望遠レンズ付きカメラなどによる調査団に対する撮影の圧力、県教委や市教委などに対する圧力による、全国調査団との面会拒否の妨害を繰り広げました」（P73）。

「（調査）2 日目も、正体不明の数名の男が、廿日市町と福山市に入った調査団を尾行し、望遠レンズ付きカメラで撮影。福山市では、調査団と市教委との話し合いを隣室で盗聴するという、戦前の特攻警察まがいの行動さえとりました」。「さらに福山市内の小中学校長宛に、『全解連の調査団に会うな。市教委も会わない。やむを得ない場合は証拠を残すな』旨の通達が何者かによって流されていました。（P82）

盗聴の件については、同和黒書②でも「調査の席に着いた教育長室に仕切りひとつへだてた次長室には、本庁の総務課長と「解同」員と見られる者がひそんでぬすみ聞きするという、この上ない挑戦的仕打ちである」（P16）。と、解放同盟とそれに屈服した福山市が一緒になって事件の解明を拒んでいたことを記しています。

1 月の福山市と豊田郡本郷町校長 2 人に次いで 3 人目の校長自殺。県教委も事態を重視し実態調査に乗り出しましたが、3日過ぎても「はっきりした動機は不明」、2 人の校長自殺の原因を「わからない」と繰り返す、と県教委の姿勢を中国新聞も批判しています。

4月29日、県教委は3人の校長自殺事件について県議会文教委員会で報告しました。

「宮内小では昨年度、在日朝鮮人を蔑視した発言の指導をめぐって、校内の同和教育委員会、職員会議などで1ヶ月にわたって話し合いが続けられた。このことは昨年度内に解決している。なお、同校の

同和教育について部落解放同盟から介入があったかのごとく伝えられているが、そのような事実はなかった」。

わざわざ「解放同盟からの介入はない」ことを付け加えて報告しています。

3校に共通する課題として、「教職員の協力体制が弱く、教職員の間に不協和音が出ている状態で、孤独に立たされていた」と指摘しています。

実は宮内小では、2 月 23 日に 4 年生の理科の授業中に「朝鮮人マネすんなや」という発言があり、これが民族差別だと問題視されていたのです。同和教育委員会が中心となり確認、取り組みを行い、校長や職員会議で確認しています。児童の問題発言については、先生から注意を与え皆が間違いを正し合うことで十分なのですが、当時の広島県ではそうはなりませんでした。宮内小では 3 月 26 日に全体研修会がもたれ、「1 学級の問題ではない」となり、「民族差別問題については来年度も引き続いて指導する」と全教職員で確認されています。

同和利権の真相①も宮内小のことを取り上げています。しかし前記とはまた別の部落差別問題で「宮内小学校長の自殺は次のような背景があって起こった事件だった」と、以下のように自殺の背景を描いています。

「児童の 1 人が『長吏』という江戸時代の賤民身分の職業を表す言

葉を使ったことが校内で問題になった。これに対し、同校の教頭が先頭に立って、校長に『差別事件だ。責任を取れ』『お前が校長になるのは早すぎた』などと、辱めるような追及を連日にわたって執拗に行った。校長はこれを苦に自殺したとみられている。解放同盟の直接関与こそなかったものの、校長追及の先頭に立った教頭をはじめとする教員たちは、熱心な解放教育推進者として知られていた。この事件にはエピローグがある。校長の校内での自殺にショックを受けた町民約 3000 人が県教委、町教委に自殺の真相究明を求める署名を提出している。当時の広島ではかなりの勇気がいる行動だったが教委側はこれを無視しただけでなく、解放同盟に内通、署名用紙を差し出していた可能性が強い。というのも署名提出後、署名者一人ひとりにその行為を非難する文書が、解放同盟県連から郵送されてきたからだ。当時の行政と解放同盟との緊密な関係がうかがわれる」。（P214）

宮内小の校長自殺問題について中野氏は全解連の調査活動をもとにこう述べています。

「廿日市町のある広島県西部は、暴力集団中核派の流れを汲む教師が解放研をつくり、策動を繰り返していました。宮内小学校でも、解放研教師数名が 30 余名の教員を支配していました。校長に話しかけたりお茶を入れてあげたりする教員に対して、『お前は校長派か、反動の手先め』と言ったり、『お前は早く校長になりすぎた。わしの方がお前より偉い』などと、校長いじめも日常化していました。同僚いじめも頻繁に行われたため、しまいには休み時間になっても皆、職員室へ戻りたがらなくなっていたのです。児童の行進についても、

彼らは『音楽に合わせて歩くのは、ファシズムだ』と主張したりしました」。「民族問題に関するトラブルが校内で起こった時にも、彼らはこれを同和問題に結びつけ、解同と連絡を取りつつ会議（同和推進委員会や職員会議）を何回も開かせました」。「また校長を廿日市町史編纂室にいかせて、民族問題について調べさせています。校長はオロオロし、親しい友人に『学校を辞めたい』『死んだほうがマシだ』ともらしていました。児童たちに、『命を大切に』と教えていた校長は、4 月 9 日朝、校内で自殺したそうです。」（たたかって P80）。

宮内小学校では在日朝鮮人を蔑視した発言と部落差別につながる発言が両方あったのです。「長吏」という、解放同盟が差別事件の口実にして介入するような発言があったのです。いつもだと解放同盟が介入し糾弾が行われるのですが、そうならなかったのは不可解だと思っていました。中野氏が指摘したように「解同と連絡」をとっていたけれど、校長が自殺してしまったのでやめたということでしょう。

県教委は6月30日発行の公報誌「教育のひろば」で一連の校長自殺問題を取り上げていますが、その中でこの『長吏』発言を、差別発言ではなく「あだ名の問題として整理されている」と書いています。問題発言が事情に左右されて都合により差別発言になったり、ならなかったりするという不都合な真実です。

相次ぐ校長の自殺に日本共産党は事態を重大視し、同党中央機関紙「赤旗」で自殺事件をとりあげ、そこで同和教育のあり方に問題があるとの見解を示します（4 月 18 日付）。

5 月 10 日付では解放同盟の教育介入の問題だとして次のように書いています。

「広島県下では『解同』小森派による教育介入、暴力的糾弾があちこちの学校で発生、関係者の自殺未遂が起るたびに県教委が『解同』と癒着し、彼らを利用して人事をふくめ反動的教育行政をすすめている、と批判されてきました」、「宮内小の場合も関係者の話を総合すると、特殊な『解放教育』を唱える一部教師によって『同和差別』問題が故意にひき起こされ教師間で紛糾、『校長や教頭に精神的な打撃を与えるやり方でもめぬいた』事実が浮かび上がっています」、「宮内小学校長の死を追うなら、『解同』による教育への無法な介入、不正常な実態を関係者が勇気をもって告発することは避けて通れません」

この赤旗記事は、共産党や支援する人々によって配布されました。

しかし驚いたことに「宮内小学校職員」が赤旗記事の配布に「抗議する」として「申し入れ書」を 4 月 20 日付けで日本共産党広島県委員会に送っています。真相を解明しようとする赤旗に、なぜ宮内小学校職員が抗議したのか不思議ですが、「やはり教員たちは支配されていた」と考えれば理解できます。抗議することに抗えば、「おまえは反動の手先か」と糾弾を受けるおそれがあったのでしょう。「抗議文」で踏み絵を踏まされたのです。

宮内小では4月26日に PTA 総会が行われましたが、校長の自殺

について学校から説明は何もなく、議事にも入れず総会を終了しようとしていました。たまりかねてこの事件について発言した保護者に参加者から大きな拍手が送られるということがありました。

校長自殺という重大事を PTA 総会の議事にもできないのはなぜでしょうか。保護者に真相を語るとどうなるか、教職員らに恐怖があったのではないかと想像します。「教職員は支配されていた」ということを補強する出来事です。

校長自殺を報じた赤旗記事に対して、他にも抗議が送られます。

広同教は抗議の文書を５月７日付けで送付。部落解放研究所（解放同盟系）も同月 9 日、抗議書を送付。共闘会議（部落解放広島県共闘会議）も赤旗記事が学校現場へ混乱を持ち込む「党利党略による介入」だと断定し、組織の総体をあげて、糾弾、抗議するとして同月 20 日、抗議文を送っています。

激しい対立抗争が教育現場に持ち込まれ繰り広げられたのです。